第２章　子ども向きの本としての昔話集の比較

本章では、第Ⅰ部第２章第５節でグリム兄弟の加筆に見られた傾向を糸口として、他の(創作) 昔話との比較を試みる。

第１節　道徳に関して

グリムの「怠け者の糸紡ぎ女」(KHM 128) では、怠け者の妻は、夫から二度と「糸を紡げ」と言われないように仕組み、それが成功する話であった。この話の末尾に、第４版から次のような言葉が付け加えられたことは、既に指摘した通りである。

> でも、こんなのはいやな女だって、あなたも言わずにはいられないでしょう (S. 228)。

これは、勤勉を重んじる道徳的な配慮からなされたものだと一般に見られているが、本節では、昔話のこうした道徳について考察していく。

フランスのペローやオーノワ夫人の昔話には、結びに教訓詩が付けられている。例えばオーノワ夫人の「金髪の美しい乙女」は、グリム兄弟も指摘しているように、「正直なフェレナントと腹黒いフェレナント」(KHM 126) に相当する話である。助けてあげた動物 (鯉、カラス、フクロウ) が後に、アブナンを窮地から救ってくれるのである。「金髪の美しい乙女」の結びには、次の詩がつけられている。

> **もし偶然にだれかが困って**
> **あなたに助けを求めたなら、**
> **必ず助けてあげなさい、**
> **いつかは必ずいいことがありますよ。**
> 心のやさしいアブナンは、
> 鯉とカラスの命を救い、
> そしてひどく醜いフクロウの
> 命までも助けてやりましたが、
> そのときだれがそのために
> いいことが起こると思ったでしょう？
> またアブナンは王様につかえて、
> 憎からず思う人の
> たぐいまれな美しさにもめげず、
> 悲しみをこらえて
> 王に変わらぬ忠誠を尽くしました。
> それでも身に覚えのない罪を着せられましたが、
> いつかは必ず幸せは訪れるもの、
> なぜならアブナンの徳を

どうして天が見過ごすことがありましょう (オーノワ夫人 1981 (上村訳) S. 99ff.)[1]。

オーノワ夫人の話に対して、グリム兄弟は、「道徳的な見解」がついていると批判的に指摘していることは既に述べた (Grimm 1994 Bd. 3 S. 314)。確かにグリム兄弟の「正直なフェレナントと腹黒いフェレナント」(KHM 126) においては、正直なフェレナントが助けてあげた魚が後にフェレナントを救っているため、筋の上では、彼の善行は報われていることになる。しかし、「困っている人がいたら、助けてあげなさい」といった教訓めいた見解は付けられていない。

同様に「白い蛇」(KHM 017)、「ふたりの兄弟」(KHM 060)、「みつばちの女王」(KHM 062)、「ふたりの旅人」(KHM 107)、「あめふらし」(KHM 191) においても動物が恩返しをしているが、オーノワ夫人が説くような道徳的な見解は盛り込まれていない。

本論第 I 部第 3 章で取り扱った例のように、およそ教訓的とは言えないものも『昔話集』に採用されていることも考え合わせれば、「怠け者の糸紡ぎ女」(KHM 128) において教訓めいた一言がグリム兄弟の手によって付け加えられたのも、この話に向けられる可能性のある批判をかわすため、すなわちこの話を『昔話集』に残すための手段でしかないように思える。なぜなら、道徳的に感心しない話であると真剣に考えていたのならば、この話を掲載せず、別の道徳的な話を採用することも可能であったし、また怠け者の女が筋の上で罰せられるように書きかえることさえも容易だからだ[2]。

また本論第 II 部第 1 章第 3 節で引用したパウリの話 (第 364 話)「料理女が二羽のローストチキンを平らげたこと」やヴィクラムの「仕立屋が天国にやって来て、神様の足台を老婆に向かって投げつけたこと」(第 110 話) の最後にも教訓が付いているが、どちらにおいても、教訓を語ることよりは筋のおもしろさの方に重点が置かれている。グリム兄弟が付け足した上記の教訓は、これら 16 世紀の文学に付けられた教訓とある種通じるところがあるように思う。それらとの包括的な比較は、稿を改めて考察してみたい。

さて一方で、グリム兄弟が文献から昔話を採用した場合には、あからさまに教訓を説き示している箇所を削除している場合がほとんどであることにも着目される。

例えば、「小鼠と小鳥と焼きソーセージの話」(KHM 023)、「親不幸な息子」(KHM 145)、「焼かれて若くなった男」(KHM 147)「エバの不揃いな子どもたち」(KHM 180)、「死神の使者」(KHM 177) などは文献から採用した話であるが、それらの原典には、道徳の教えが最後に付いていた。それをグリム兄弟は削除しているのだ (Vgl. Solms 1999 S. 204)。ただし、「兎とはりねずみ」(KHM 187) は例外的に、原典にあった道徳的な箇所がそのまま残されている[3]。

---

[1] D'Aulnoy 1997 Tome 1 S. 72.

[2] 同様に、「3 人の糸紡ぎ女」(KHM 014) において、怠け者の少女が、うまく王子と結婚出来るという幸運を手にしているが、最後に勤勉を讃えるような教訓は付けられていないことにも注目出来る。

[3] 「兎とはりねずみ」の教訓は、身分が高いと思っている人 (兎) でも、身分の低い人 (はりねずみ) を笑いものにしてはいけない、そしてお嫁さんにもらうならば、同じ身分で見た目も似ている人がよい、ということである。

しかし、グリム兄弟が教訓を重んじていたならば、原典に存在した教訓をわざわざ削除する必要はなかっただろう。

同様に注目されるのは、「蛙の王様または鉄のハインリヒ」(KHM 001) の中で「おまえが約束したことは、守らなくてはならない」「おまえが困っていた時に助けてくれた者を、後になってないがしろにしてはならない」という、子どもをしつけるような王の言葉が付け加えられていることである。ところがこの言葉を向けられた王女が実際にとる行動は、言われたこととはまるで反対なのである。一概に、道徳的な訓戒を与えられた者たちは、それに背いているにもかかわらず、それによって、罰を受けるどころか幸せを手に入れているのだ (Rölleke 1986 S. 26)。そうしたことからも、『昔話集』の編者の主眼が道徳にあったとは思えない。

さて、グリム兄弟の『昔話集』の中で、道徳的でない登場人物といえば、これまでに幾度も取り上げてきた「賭博師ハンス」(KHM 082) の主人公がいる。道徳的とは思えない願い事をしていたあのハンスである。彼と同様の、あまり感心できない願い事をする男が、ハウフの「冷たい心臓」(『シュペッサルトの宿屋』) にも登場している。

主人公のペーターはしがない炭焼きで、自分の生活に満足していない。そして楽に金を手に入れたいと考え、言い伝えに聞くガラスの小人を呼び出してみる。出てきた小人は、3つの願いを叶えてくれるという。そこでペーターがする一番目の願いは、次のものである。

> 僕の心が求めているものを望んでよいのですね。じゃあ、僕は一つ目に、ダンスの王よりもうまく踊れて、いつもエツェヒールと同じだけたくさんのお金を宿屋に持っていけることを望みます (Hauff 1969 Bd. 2 S. 235)。

こうしてペーターは、飲み屋 (兼宿屋) で幅を利かせているエツェヒールという金持ちと同量の金と、ダンスの王と呼ばれている若者より上手に踊れることを望むのである。これは、教育的な観点からみれば望ましくない願いだろう。よって、ハウフの昔話の小人は、すかさず説教をたれる。

> **ばかもの！なんてあさましい願いなんだ。**うまく踊れて、賭けの金が欲しいだって。愚かなペーターよ、おまえの幸せをそんなものだと勘違いして恥ずかしくないのか。おまえがうまく踊れたところで、おまえとおまえの母親にとって何になるっていうんだ。おまえはただ飲み屋のためだけに金を望んだけれど、そんな金が一体何になるんだ。あわれなダンスの王の金は、飲み屋でどうなると思っているんだ。その他の日は一週間まるまる、これまでと同様、おまえには何にもないんだぞ。さあ、もう一つ願いを与えるが、もっと分別のあることが願えるように気をつけなさい (Hauff 1969 Bd. 2 S. 235)。

一方、グリム兄弟の「賭博師ハンス」(KHM 082) では、ハンスが願いを口にする前に、神はこう考えている。「ハンスは天国へ行くことを願うだろう、と思っていました」(Grimm

1980 Bd. 1 S. 405)。しかし、意に反してハンスが恥知らずな願いを申し出ても、説教をたれることもなく、嫌味のひとつも言わずに、「神は、願ったもの全部をハンスに与えて、それから聖ペテロと一緒にまた旅を続け」(Grimm 1980 Bd. 1 S. 405) るのである。結局のところ願いを叶えてあげるのはどちらの話でも同様だが、グリム兄弟の昔話では、神も、道徳的見地からの判断を下したりはしていないのである[1]。そしてまた、グリム兄弟がこの昔話の中の神にヴォーダンを想起していたことは、第II部で指摘した通りである。

さて、教育的な配慮を謳っていたA. L. グリムも、道徳的な見解を盛り込むことを忘れない。前節でも取り上げた「ハンス・ドゥーデルデー」(「漁夫とその妻の話」(KHM 019) の類話) を例にしてみよう。そこでは、皇帝にまでしてもらったハンス・ドゥーデルデーが、再び妻にそそのかされて、魚に願いを伝えに行っている。その願いとは、神のように雨を降らせたり、好きな季節を呼び出したりしたいというものである。それを聞いたひらめは次のように反応する。

> いやはや、皇帝のドゥーデルデーよ、おまえのおかみさんもおまえも、何にも満足できないってことが分かった。**だからおまえはまた、もとの漁師ドゥーデルデーになるがいい。あの頃は、おまえは今みたいに思い上がってもいなければ、貪欲でもなかった** (A. L. Grimm 1992 S. 92)。

ひらめはこう言ってから、ふたりを元の貧しい漁師に戻している。そしてふたりの貪欲さが罰せられたということが、明確に示されている。一方、グリム兄弟の「漁夫とその妻の話」では、神になりたいという妻の意向を漁師が伝えると、ひらめはこう言う。

> 「行きな。おかみさんはまた小便つぼのような家にいるよ。」
> ふたりは、今日にいたるまで、そこに住んでいます (Grimm 1980 Bd. 1 S. 127)。

このように、グリム兄弟版でのひらめは、A. L. グリムのような教訓めいたことは口にしておらず、やはり淡々と行動しているのである。

「漁夫とその妻の話」(KHM 019) の類話は、ベヒシュタインにも「酢壺の中の夫と妻」という題で収録されている。そこでは酢壺に暮らす夫婦が、金の小鳥 (ここでは魚ではない) に願いを叶えてもらうのだが、ここでもその願いは徐々にエスカレートしている。そして最後に神になることを願うと、この夫婦ももといた酢壺に戻されてしまうのだが、この話は、次のように締めくくられている。

> これは、決して満足することのできない人たちのための、ひとつの教訓です (Bechstein 1999 S. 263)。

---

[1] 「白い花嫁と黒い花嫁」(KHM 135) では、娘は、決してからになることのない財布を望んでいる。神は、この願いを聞き入れる。ただし、この話においては、「一番良いものを忘れないように」と言い、3つ目に、天国に行くことを願うよう促してはいる。

A. L. グリム同様、ベヒシュタインの昔話においても、教訓的なところが目につく。それは、「金の鹿」にも如実に現れている。これは、物乞いをして歩く貧しい孤児 (兄と妹) の話で、ふたりは最後に人食い男の宝を獲得し、裕福になる。たいていの昔話はここで終わるのだが、ベヒシュタイン版には、以下の部分が続く。

> でもふたりは、その幸せを貧しい人にたくさん分け与えました。そしてたくさんの善い行いをしました。なぜなら、自分たちが貧しく、物乞いをして歩かなければならなかった時がどんなにつらかったかをずっと覚えていたからです (Bechstein 1999 S. 91)。

こうした貧しい人々に対する同情の念は、アンデルセンの「火打箱」[1]からも感じられる。これは、アンデルセンが初期に書いた、民話に近い話のひとつである。アンデルセンの話においては、魔女のお婆さんが、木の穴から火打箱をとって来るように兵隊に頼む。その代わりに、そこから金貨を持ってきて良いという。しかし魔女は、火打箱を何に使うのかを教えなかったため、兵隊は魔女を殺してしまう。兵隊は、取って来た金貨のおかげで金持ちになる。

> さて、兵隊さんは毎日毎日面白く暮らしました。芝居を見に行ったり、王宮前の公園へ馬車を走らせて、**貧しい人たちにお金をたくさんほどこしたりしました。ほんとに、これはよい行いでした。もうずっと前から、兵隊さんは、お金が一文もないとどんなに困るものか、身におぼえがあったのです。**——いまはお金持ちで、りっぱな着物をきて、友だちもたくさんできました。みんなは、いい人だ、ほんとの紳士だ、とほめそやしました。兵隊さんも、そう言われて悪い気持ちはしませんでした (アンデルセン 1989 第一巻 (大畑訳) S. 14)。

このように、主人公が、貧しい人に親切にふるまうところは、ベヒシュタインの「金の鹿」を想起させる。ただし、アンデルセンの話においては、その後の描写にリアリティが顔をのぞかせている。

> ところが、毎日のようにお金を出すばかりで、少しもはいるということがありませんので、とうとう銀貨が二つきりになってしまいました。そこで、いままでのりっぱな部屋を出て、屋根裏の小さい部屋へ引っ越して、自分で靴をみがいたり、かがり針でつくろったりしなければなりませんでした。**もう、友だちもだれ一人たずねて来ません。**なにしろ、たくさんの階段をのぼって来なければならなかったからです (アンデルセン 1989 第一巻 (大畑訳) S. 14f.)。

---

[1] 「火打箱」は、「青いあかり」(KHM 116) の類話として、グリム兄弟が注釈の中で指摘している話である (Grimm 1994 Bd. 3 S. 209)。

しかし、再びお金を手に入れると、状況はまた変わるのである。

> またぞろ、兵隊さんは下のりっぱな部屋へ移って、りっぱな着物をきました。すると、友だちも皆、すぐ、それと知って、たいそうちやほやするのでした (アンデルセン 1989 第一巻 (大畑訳) S. 15)。

こうして、お金の有無で態度を変える人間の姿が醒めた視線で描かれてもいるのである。

このように見てくると、道徳という観点からみても、これだけの違いがあることが分かる。そしてグリム兄弟が、道徳的にはどうかと思われるような話でも「神話」的な要素を見出したものは『昔話集』に採用していることからも、神話の残滓としての昔話を提示することほどに、勧善懲悪を謳うことには関心を持っていたとは思えないのである。

第2節　性に関して

昔話は、19世紀には子ども向けのものにされていったため、性的なところは削除される傾向にあった。グリム兄弟の「ラプンツェル」(KHM 012) を批判していたA. L. グリムは、教育的観点から性的なものは排除すべきだとし、グリム兄弟を強く批判していたのであった (本論第I部第2章参照)。

同様の配慮は、ベヒシュタインも行っていた。「7羽の白鳥」は、ハウプトとホフマンによる『古代ドイツの新聞』から採った話である。その話では、川辺で体を洗っている裸の乙女の美しさに魅せられた男は、彼女をかかえて天幕の中に行く。そして娘はその夜のうちに身ごもるのである (Haupt/Hoffmann 1978 S. 129)。ベヒシュタインは、この箇所を変更し、美しい乙女が川で体を洗っていた、騎士が彼女を妻にしようと思って城に連れて帰った、というだけにとどめたのである (Bechstein 1999 S. 252)。

19世紀のものはこのような調子であり、またフランスのペローやオーノワ夫人も、サロン風のエレガントな話であるが、17世紀のバジーレの話は様々な点で激しさが際立っている。「日と月とターリア」(5日目第5話) は、グリム兄弟では「いばら姫」(KHM 050) に相当する話である。「いばら姫」 と同様に、王女ターリアも亜麻に混じっていたトゲに刺されて死ぬ。悲しみにくれた父親は、ターリアをビロードの椅子に座らせ、森の館から去る。その後、狩をしていた王が館にたどり着き、ターリアを見つけ、次のような行動に出るのだ。

> 王様はターリアが眠っていると思ったので、声をかけたのですが、いくら叫んでみても揺すぶってみても目を覚ましません。しかしターリアが美しかったので、王様は徐々に恋の炎にあおられてしまい、彼女をかかえて寝床につれていき愛の果実を摘みとりました。そして彼女はそのままベッドに寝かせておいて、自分の国に帰り、このことは長いこと思い出しもしませんでした (Basile 1982 Bd. 5 S. 57f.)。

こうして、ターリアは眠ったまま妊娠し、9 ヵ月後には双子の子どもを生んでいる。グリム兄弟やペローでは、むろんそのような場面はない。王子がやって来た時に王女は目を覚ますだけである[1]。

さて、「日と月とターリア」の王は、ターリアが目覚めた後に、彼女のもとに通うようになる。しかしこの王にはそもそも妻がいたため、後で話がこじれるのだが、これはまたモラル的にも問題があるだろう (二重結婚もしくは不倫である)。

さて、バジーレと言えば、ブレンターノが彼の話をもとに『イタリア昔話集』を書いている。ここで両者を比較してみたい。

バジーレの「天人花」(1 日目第 2 話) では、王子が「天人花」の精の姿を目にし、その美しさに心を奪われるのであるが、その場面はこのように描写されている。

> 王子は彼女の言葉を聞いて、ろうそくのようにとろけてしまい、もういちど彼女を抱きしめてキスの封蝋でその手紙 (唇) に封印して、手をさしのべてこう言いました。「私は、あなたを私の妻、権力の主とすることを約束しましょう。あなたは私の人生の舵をもう握っていますから、心の鍵も渡します。」そして、数知れぬほどの愛の言葉を語りあっては、寝床から起き上がって、お腹に食べ物を入れてみるといった具合にして、この逢瀬をしばらくの間続けたのでした (Basile 1982 Bd. 1 S. 42)[2]。

ブレンターノが改作した話では、ミルテの精が夜に現れてもミルテの精は物語を聞かせるだけで、王子がその姿を見ようとしても、歌をうたって王子を眠り込ませることによってそれを阻止する。それにもかかわらず、王子がなんとかして眠らずにミルテの精の美しい姿を目にした時も、ブレンターノの王子は、バジーレの王子とは異なり、まことに紳士らしく、礼儀正しく振舞う。つまり、自分がはめていた指輪をミルテの精の指にはめ、妻になってくれるように頼む**だけ**なのである。

> ついにミルテの乙女は、両親が許してくれたら、この国の王妃になると約束してくれました。そして王子には、まず婚礼の準備をしてから、私の両親に尋ねてください、それまでは二度とお目にかかりません、と言いました。王子は全てを承諾しました (Brentano 1978 S. 321)。

このようにブレンターノの話は、上品にまとめられている。やはりブレンターノが活動した時期もビーダーマイヤー時代に重なっていることが、その一因と言えるだろうか。

---

[1] ペローでは、ちょうど目覚めの時が来ていたため、王子が来たときに、王女が目を覚ます。グリムの「いばら姫」(KHM 050) では、王子がキスをすると目覚める。

[2] 最後の箇所は、杉山らによる邦訳では「このあと、数知れぬ**愛の言葉と愛撫**を交わしてから起き上がり、たっぷり腹ごしらえしては、また**愛しあって**数日を過ごしたのでありました」(バジーレ 1995 S. 37) となっている。この邦訳には原典が示されていないが、英語訳からの重訳と思われる。リープレヒトのドイツ語訳よりも直接的な表現となっている。

さて、グリム兄弟の書きかえで、「性」にまつわる批判を受けているものがある。それは「マリアの子」(KHM 003) における書きかえである。聖母マリアのもとに引き取られた少女は、禁じられていた戸を開けるだけでなく、さらには開けていないという嘘をついたために、天国から追放されて下界の荒野戻された少女は、やむを得ず近くの木の洞の中に住むのだが、この場面は以下のように書きかえられていったのである。

1810 年手稿

少女は、洞から出て行き、木の前の陽だまりに座りました。少女の (長い) 金髪は、天国で着ていた深紅のビロードの服のところまで垂れ下がっていました (S. 198)。

初版

少女の服もぼろぼろになってしまい、体から落ちてしまいました。そこで少女は葉っぱに頭まですっぽりとくるまりました。そして太陽がまた暖かく照るようになると、外に出て行き、木の前に座りました。そして長い髪の毛が体をマントのようにすっぽりと覆いました (S. 199)。

第 7 版

まもなく、少女の服はぼろぼろになり、少しずつ体から落ちていきました。そしてまた太陽が暖かく照るようになると、少女は外へ行って、木の前に座りました。そして長い髪の毛が体をマントのようにすっぽりと覆いました (S. 38)。

版を重ねるうちにこのように変更されたことに対して、ボティックハイマーは次のように指摘する。

> けれども私たちは、マリアの子が金髪の下は一糸まとわぬ姿であることを知っている。マリアの子を性的にすきだらけの状態にすることは意図的に行われたに違いない。なぜならグリムは、性的なものを見つけ次第、削除していたからである。ここではしかし、グリムは、徐々にそして首尾一貫して、彼女の裸体に対する意識を――自らの意識とさらには読者の意識をも――高めているのである (Bottigheimer 1987 S. 159)。

そして、グリム兄弟が書きかえたことによって、強姦のイメージと結びつけられるようになったという解釈までを行っているのだが (Bottigheimer 1987 S. 159)、実際にそうであろうか。グリム兄弟の関心がヒロインの裸にあったというのがボティックハイマーの解釈であるが、本論では別の角度から、この書きかえを考えたい。

グリム兄弟は、少女の服がなくなり金髪が体をすっぽりと覆うというところが、ヴァルキューレの姿を彷彿とさせると考えていたのである。ヴィルヘルムは、『昔話集』第 2 版によせた前書きの中で、金の髪にすっぽりとくるまれた王女の姿を、ヴァルキューレのひとりであるシグルーンの姿と重ね合わせている (W. Grimm 1992 Bd. 1 S. 342)。そしてヴィルヘルムは、本論では第 II 部で扱った『エッダ』の「フンディング殺しのヘルギの歌 II」をその注において引用している[1]。

---

[1] 本論第 II 部では、この同じ箇所が、「きょうかたびら」(KHM 109) と結び付けられているこ

ヘルギ

「セヴァフィヨルのシグルーンよ。ヘルギが、悲しみの露 (血) にぬれているのは、そなたのせいなのだ。**太陽のように輝く**、黄金で飾られた南の娘よ、そなたは寝る前に苦い涙を流して苦しむ。それがわたしの胸の上に冷たくおちて、悲しみのため重くなり、燃えるような血になるのだ」(谷口 1973 S. 124)。

こうした関連付けをしていることからも、グリム兄弟は、服がなくなって娘が**裸になる**ということよりは、娘の体が**金髪で包まれる**ことの方に関心を持っていたと思われる。ここで示唆的なのは、「ガラスの棺」(KHM 163) の例である。これは、グリム兄弟が文献 (シルヴァヌス)[1]から採用したもので、ここにも**裸の**乙女が登場するからである。

シルヴァヌス

彼は、その中に、並外れて美しく、素晴らしい姿の女性が、**一糸纏わぬ姿で** (ganz nackende) 長々と横たわっているのを見たのです (Rölleke 1998 S. 294)。

グリム兄弟 (第 7 版)

彼が、非常に美しい少女の姿を目にした時の驚きはどのようなものだったでしょうか。少女は、寝ているようでした。そして**長い金髪が、高価なマントのように彼女を包んでいました** (S. 289)。

このように、原典においては乙女は「一糸纏わぬ姿で」横たわっている。それをグリム兄弟はわざわざ「長いブロンドの髪」で娘の体を包んでいることにしているのである。注釈には直接の言及はなされていないが、やはりここにも、グリム兄弟はヴァルキューレの姿を見出していたのではないか。

ボティックハイマーは、グリム兄弟が書きかえたことによって、裸への関心を強めたと解釈し、こう断定する。

「マリアの子」(KHM 003) には、ヒロインが裸であることについての詳しい叙述がある (Bottigheimer 1987 S. 159)。

しかし、グリム兄弟の描写は、第 7 版においても上記に引用した箇所のみであり、ボティックハイマーが指摘する程の裸体への関心は感じられない。裸体への関心があるというなら、例えばティークの次のような描写のことを言うべきではないだろうか。

歌い終わると、女は服を脱ぎ始め、着ていた服を壁の立派な箪笥にしまっていった。まず頭から黄金のベールをとると、長く黒い豊かな巻髪が腰のところまで流れ落ちた。

とを指摘した (第 II 部第 3 章)。

[1] Sylvanus: Das verwöhnte Mutter-Söhngen. Freyberg 1728.

次に女は胸を覆っていた衣をとった。若者はこの世のものとも思われない美しさを目にして我を忘れ、この世のことも忘れてしまった。女が次々と身体を覆うものをとりのけていった時、若者は息をつくのも忘れていた。ついに女は裸で広間を行ったり来たりした。そして、重々しく揺れる巻髪は、体をとりまく黒く波うつ海となり、その中から清らかな体が大理石のように輝く姿で、輝きを放ちながら見えかくれした (Tieck 1986 S. 33)。

これは、ティークの「ルーネンベルク」[1]の一場面である。こうした表現と比べてみても、「マリアの子」(KHM 003) に対するボティックハイマーの指摘は的を射ていないと言える。

第3節　愛情に関して

親子間の愛情

グリム兄弟は、子どもに酷い仕打ちをする母親を、実の母親から継母に変更していた。「ヘンゼルとグレーテル」(KHM 015)、「ホレおばさん」(KHM 024)、「白雪姫」(KHM 053) などがその例である。昔話の中では、親子や兄弟姉妹の間の憎悪・反目は珍しくはないのだが、これは19世紀に理想とされた、調和された家庭像にそぐわないという理由が主にあったようだ[2]。

一方ベヒシュタインは、このように全ての悪を継母に押し付けるという方法に疑問を投げかけている。そして、好評を博した『ドイツ昔話集』(1845年) に続けて出版した『新ドイツ昔話集』(1856年) の序文において、継母を登場させないという方針を示している。なぜなら子どもたちに最も人気のある読み物は昔話なのだが、そこでは継母は常に悪役であり、実際に継母に育てられている子どもたちが、こうした昔話のために継母に対して反感を抱くようになっては不幸だと考えたからである (Bechstein 1999 S. 468f.)。実際『新ドイツ昔話集』には、継母はひとりも登場しない[3]。

対処の仕方は違うにせよ、そのようにして親子の愛情への配慮が行われたのだ。

ではここで、父親が実の娘と結婚しようとする話である「千枚皮」(KHM 065) の話を考察したい。グリム兄弟は、娘が最後に結婚をするのは、父親ではなく別の王だということになるように書きかえてはいるが、父親の近親相姦願望が語られている冒頭部は、削除されずに残されているからだ。

---

[1] これは、昔話というよりは、伝説を下敷きにしたような話であるが、Klotz と Tismar どちらの創作昔話論においても (Klotz 1985, Mayer/Tismar 1997) 言及されている作品である。

[2] 19世紀のドイツの家族については、Weber-Kellermann 1974 S. 97ff. 参照。

[3] 先に刊行された『ドイツ昔話集』には、意地悪な継母は登場していた。「白雪姫」、「灰かぶり」、「金のマリアとピッチのマリア」など。

継母に関しては、子どもにとっては実の母親も「継母」になりうるという心理学的な解釈がある (Lüthi 1989 S. 60f.)。またヴェーバー＝ケラーマンによる社会史的な解釈もある (Weber-Kellermann 1974 S. 32ff.)。

さらに「白雪姫」の場合、類話を観察すると、継母となっている話の方が数が多い (Lüthi 1989 S. 60)。

この話の変遷を見てみると、一番古いものは、ヤーコプが書きとめた1810年手稿である。レレケの研究によれば、それはおそらくカール・ネールリヒ (Carl Nehrlich, 1773-1849年)[1]の長編小説『シリー』から抜書きをしたものである[2]。

1810年版では、千枚皮は、継母によって家から追い出されている。なぜなら、よその紳士が継母の娘を無視して、継子である千枚皮に愛の印の指輪を与えたからであった。すなわち、1810年手稿には、近親相姦願望のモチーフは見られなかったのである。

しかしグリム兄弟が『昔話集』初版に採用したのは、ドルトヒェン・ヴィルトから聞いた別の類話で、ネールリヒの話は細部に利用するにとどめられた。つまり、わざわざ父親の近親相姦願望が語られているドルトヒェンの話をグリム兄弟が選んでいるのだ。

その理由を探るために、まずはグリム兄弟自身が付けた注釈を見てみると、そこでグリム兄弟は、この話をストラパローラの「箪笥の中の乙女」(第1夜第4話)、ペンタメローネの「牝熊」(第2夜第6話)、さらにペローの「ろばの皮」と関連付けている。

ストラパローラの「箪笥の中の乙女」では、妻が死に際に、自分の指輪がぴったり合う女性としか再婚しないことを夫に誓わせている。その指輪は、誰の指にも合わないが、実の娘にだけはぴったり合うのだ。父親の求婚から逃れるため、この娘は箪笥の中に身を潜める。この箪笥はジェノヴァの商人を経由し、イギリスの王に買い取られている。

バジーレの「牝熊」でも同様に、自分と同程度に美しい女とでなければ再婚しないことを妻が夫に誓わせている。ここでは、娘は物売りの老婆から不思議な棒をもらっている。それをくわえると、すぐに熊に変身することが出来るものである。そして熊の姿となって父親から逃れている。

ペローの「ろばの皮」においても、いまわの際の王妃は、自分よりも美しく、賢い女とでなければ再婚しないことを夫に誓わせてから息をひきとっている。そのため、娘に白羽の矢が立てられるのである。そのため娘は、ろばの皮を被って逃げ出す。

このように、どの話においても父親の近親相姦願望が語られており、それが筋の原動力となっている。これは、子ども向けの話としては好ましいものではないだろうが、このようにストラパローラにまで遡ることの出来る、広く流布しているモチーフの一端だということをグリム兄弟も強く認識していたのである。

それだけでなく、近親相姦のモチーフは、古代の伝承にもしばしば登場しているものである。ゼウスは姉のヘラを妻にしているし (ケレーニィ 1995 S. 111参照)、北欧神話でもヴァン神族は近親結婚を許していたと言われている。スノリの「ユングリンガサガ」(『ヘイムスクリングラ』の序章) では、ニョルズは妹にフレイとフレイヤを生ませている[3]。このフレイとフレイヤの兄妹も、別の相手と結婚するものの、関係を結んでいたことが『エッダ』の「ロキの口論」で示唆されている[4]。時代は下って、ハルトマン・フォン・アウエ

---

[1] ネールリヒは、アルニムとブレンターノの『少年の魔法の角笛』の重要な協力者で、90歌以上が彼によって記録されたという。

[2] この経緯に関しては、Rölleke 1985 所収の Allerleirauh: Eine bisher unbekannte Fassung vor Grimm. に詳しい。また、板倉 1994にも論考がある。

[3] 「ニョルズはヴァンのところにいたとき、妹を妻にしていた」(スノリ 1976 (谷口訳) S. 81)。

[4] ロキが神々を罵る時に、フレイヤに向かってはこう悪態をついている。「黙れ、フレイヤ、魔女だ、お前は。けしからぬことばかりしおって。お前の兄といるところをやさしい神々がふみ

による『グレゴリウス』(1190-97 年頃) においても、兄と妹の間に誕生したグレゴリウスが、後に実母と結ばれるという二重の近親相姦が描かれている。そして父と娘の近親相姦は、中世に広く流布していた『ゲスタ・ロマノールム』[1]の「ティルスのアポロニウス」においても語られている。そこでは、アンティオクス王が美しい自分の娘と無理やりに関係を結んでいる (伊藤 1988 S. 593f.)。父娘の近親相姦 (願望) は、さらにグリム兄弟の『ドイツ伝説集』でも語られている。例えば、488 番「小犬のクヴェードル」において、ハインリヒ 3 世の娘マティルトは大変美しいため、父親までが娘に恋をしてしまう。そのためマティルトは、自分を醜くしてくれるよう神に頼むのである (Grimm 1992 Bd. 2 S. 146)。

グリム兄弟は、そうした伝承としてのつらなりをふまえて、あえてドルトヒェンの話を採用したのだろう。こうしたことを考え合わせれば、「ラプンツェル」(KHM 012) においてはA. L. グリムらの批判を受けて妊娠を隠してはいるが、そのように当時の人々の意向や期待に添う形に昔話を整えることが最重要視されていたわけではなかったようだ。グリム兄弟の編纂方法には、時代的にも地理的にも広く受け継がれているものをドイツの伝承の中に見つけ出し、それを残していく、という意思が感じられるのである。

夫婦（恋人）間の愛情

親子の愛情の次は、夫婦 (恋人) 間の愛情という観点からの考察に移りたい。

グリム兄弟も注釈の中で指摘しているように、アンデルセンの「小クラウスと大クラウス」は、「小百姓」(KHM 061) の類話である (Grimm 1994 Bd. 3 S. 122)。

グリム兄弟の話では、粉屋のおかみが、亭主の留守中に教会の坊主を招き入れ、亭主には出さないようなご馳走をふるまう。すると予期せぬほど早くに亭主が帰宅するのだ。グリム兄弟の「小百姓」では、その場面は次のように描写されている。

> さて、ふたりが席について食べようとした時、外で戸を叩く音がしました。おかみさんは、「まあ、うちの亭主だわ」と言いました。そして急いで焼肉をタイル張りの暖炉の中に、ワインを枕の下に、サラダをベッドの上に、ケーキをベッドの下に、坊主を玄関の間の戸棚の中に隠しました (Grimm 1980 Bd. 1 S. 336)。

アンデルセンの話においても、同様に教会の役僧がやって来て、ご馳走にあずかっている。そこに亭主が帰宅する。

> その時、だれかが馬に乗って、街道から家の方へ来るのが聞こえました。それはおかみさんのご主人が、家へ帰って来るところだったのです。
>
> **この人はたいそういい人でした。けれども、役僧の顔を見るのが何よりもきらい、**

込んだときにゃ、フレイヤ、お前は臭いやつを一発放ちやがって」(谷口 1973 S. 83f.)。

[1] 『ゲスタ・ロマノールム』は中世ヨーロッパの代表的なキリスト教説話集である。しかし、その作者ないし編者は不明であり、イギリスもしくはドイツが故郷だと言われている。『ゲスタ・ロマノールム』のラテン語原典は、13 世紀末頃イギリスで成ったというのが有力な説である。いずれにせよ、フランスやイタリアではない。グリム兄弟も『注釈篇』でこの書について言及している (Grimm 1994 Bd. 3 S. 306ff.)。

という変な癖がありました。目の前に役僧が現われようものなら、まるで気が狂ったようになるのでした。じつは、そういうわけで、**この役僧は、主人が留守だと知って、おかみさんに、こんにちは、を言いに来たのです。**そして、**親切な**おかみさんの方でも、ありったけのごちそうを出したのでした。二人は、ご主人の足音を聞くとびっくりしました。おかみさんは、役僧に、すみにある大きな箱の中にかくれてくださいと頼みました (アンデルセン 1989 第一巻 (大畑訳) S. 24f.)。

このように、夫が役僧を嫌う「理由」が説明されているのだが、とってつけたものであることは明らかで、不倫という事態から目をそらそうとする作者アンデルセンの苦心がうかがえる箇所である。そうした説明を試みていない分、グリム兄弟の方がいさぎよいようだ。グリム兄弟がこの昔話をどういった伝承と結び付けていたのかということに関しては、本論第II部第3章で既に言及したので、ここでは繰り返さない。

さて、グリム兄弟の加筆には、夫婦間の愛情を美化するような表現を加える傾向が見られたが、恋愛関係が軽妙洒脱に描写されることがないのも、グリムのひとつの特徴である。

例えば、ベヒシュタインの「魔法の戦い」は、「泥棒の名人とその師匠」(KHM 068) の類話である。魔法使いの下で働く若者は、留守の間に、密かに呪文の本を読み、燕に変身し、魔法の書を奪って飛び去る。彼は追跡してきた魔法使いとの戦いにも勝利をおさめるのだが、この話の末尾に、グリム兄弟の「泥棒の名人とその師匠」には見られない「王女との結婚」が語られている。

> 王女 (Prinzessin) は、今起こったことに、とても驚きました。王女はまだとても若くて、こんなことには慣れていなかったのです。そして、王女は若者に思いをささげてくれました。でも、それには条件をつけました。それは、**これからはどんな姿にも変身しないこと、そして変わらぬ愛を持ち続けることでした。**若者はそれを誓いました。そして、小さな魔法の書を火にくべてしまいました (Bechstein 1999 S. 167)。

さらに、ベヒシュタインの「魔法を習いたかった少年」の結びの部分にも同様の場面がある。

> 少年が、魔法 (Hexen) を教えてくれないか、とリースヘンに尋ねると、リースヘンは笑ってこう言いました。「あなたはもう出来るでしょう。私に魔法をかけてとりこにした (behext) のだから」(Bechstein 1999 S. 584)。

こうした軽妙洒脱な文章は、ベヒシュタインの特徴のひとつである。ベヒシュタインの昔話は、「本になった昔話」(Buchmärchen) と呼ばれているが、グリム兄弟のものに比べれば、より創作昔話に近いのである。

こうした描写は、ブレンターノの「ひと打ち7殺しの仕立て屋の昔話」にも、顔をのぞかせている。ここは、仕立て屋 (主人公) が一人称で語る箇所である。

ある日、僕が窓辺に座って縫い仕事をしていると、かわいい乙女が通りかかった。彼女はまっかなほっぺをしたりんごがいっぱい入った籠を持っていた。僕は彼女にウィンクをした。そうしたら、彼女は僕にりんごをひとつくれた。僕はお礼に、ハートの形をした針刺しを贈った。彼女はそれをとても喜んでくれた。りんごは僕の側に置いてある。僕はそのりんごを言い表しようもないほどの喜びをもって、それを見つめる。というのもこのりんごは、僕にこのりんごをくれたかわいい娘を思い出させてくれるからだ (Brentano 1978 S. 283)。

このような男女間のやりとりは、グリム兄弟の『昔話集』には見られない。ブレンターノのこの話は、グリム兄弟の「勇敢なちびの仕立て屋」(KHM 020) と「親指小僧の修業の旅」(KHM 045) を合わせて拡大したような話であるが、「勇敢なちびの仕立て屋」においては、仕立て屋と女とのやりとりはあるが、相手はジャムを売り歩く百姓のおかみである。おかみは、期待したほど仕立て屋がジャムを買わないので、「怒ってぶつぶつ言いながら去って」行くのであって、恋のやりとりなどは一切ない (Grimm 1980 Bd. 1 S. 128)。グリム兄弟の昔話には王女との結婚は多く語られているのだが、恋愛が軽妙洒脱に描写されることはないのである[1]。

第4節　残酷さに関して

さて本節では、「残酷さ」という観点からの考察をすすめるが、まずはグリム兄弟の加筆によってより残酷になっている昔話を扱う。

「手なし娘」(KHM 031) は、第2版でフィーマンの話と混交されている。

この話では、王の旅行中に妃が子どもを生んでいる。そのことを知らせる手紙は、悪魔によってすり替えられてしまう。偽の手紙には、妃が取り替え子を生んだと書いてある。それでも王は、妃をいたわるようにという返事を出す。しかしこの手紙も、悪魔によってすり替えられてしまう。その手紙の内容を見てみよう。

初版

悪魔がまた近寄ってきて、別の手紙をつかませました。その手紙で王は、妃**と子どもを国から追放するように**と命令していました (S. 136)。

第2版

悪魔が毎度、寝ている使いの者に、こっそり別の手紙をつかませたので、今度の手紙には、さらに**証拠に妃の舌と目をとっておくように**と書かれていました (S. 141)。

悪魔によって取り替えられた手紙とはいえ、第2版では非常に残酷な命令となっている。しかし、グリム兄弟は残酷さを強めるために書きかえたというわけではないようだ。

---

[1] それはハウフも同様である。ハウフにおいても、愛を捧げられる女性がほとんど登場しない。そして女性は登場しても影が薄いという池田の指摘がある (ハウフ 1998 S. 319)。

例によって『神話学』には、「生け贄」の説明として「おそらく神々には、動物の高貴な部分――頭、肝臓、心臓、舌なども捧げられただろう」(J. Grimm1992 Bd. 1 S. 46) という記述があり、その注釈には次のように記されている。「民間伝承のいたる所で、殺されることになっている人間や動物から、舌もしくは心臓を証拠に持って来るように命じるというのがあるが、それはいわば高貴な部分としてなのである」(J. Grimm1992 Bd. 1 S. 46)。

前章第4節の場合と同様に、やはりここでも、神話的な価値に目が向けられて書きかえられたのだと思われる[1]。

次に、「残酷さ」という観点から、グリム兄弟以前に刊行された昔話や、同時代の昔話との比較を行う。

ベヒシュタインの「灰かぶり」(Aschenbrödel) はグリム兄弟の「灰かぶり」(KHM 021, Aschenputtel) にかなり依存していると言われる話である[2]。両者の昔話が、どのような点で異なっているのかを考察してみたい。まずは冒頭部である。

ベヒシュタイン

ある男と女に娘がふたりいて、もうひとり継娘もいました。男のひとり目のかわいい子は、敬虔で良い娘でしたが、継母と継姉たちからは快く思われていませんでした。それでひどい扱われ方をしていました。一日中台所で過ごさなくてはならず、台所仕事を全部し、早く起きて料理と洗濯から、磨き仕事までしなければなりませんでした。**そして夜は屋根裏の物置部屋で寝なければならなかったのです。時々台所のかまどのところの灰にもぐり込んで体を暖めていました。**それで清潔には見えなかったので、母親や姉たちから、あざけって意地悪に灰かぶり (Aschenbrödelchen) と呼ばれていたのです (Bechstein 1999 S. 289)。

グリム兄弟 (第7版)

その女はふたりの娘を家に連れてきました。ふたりは、顔はきれいで白かったのですが、心は意地悪で黒かったのです。それで、かわいそうな継娘にとってのひどい時期が始まったのです。「あのばかな娘が私たちと居間に座っていていいものかしら！」と継姉たちは言いました。「パンを食べたい奴は、それを稼がなきゃね。台所の女中は出て行きなさい！」継姉たちは灰かぶりからきれいな洋服を奪い取り、灰色の古い上着を着せ、木の靴を与えました。「ちょっと、あの気位の高い王女さまをごらんよ！おめかししてるわよ。」と大声で言って、笑って、灰かぶりを台所へ連れて行きました。継娘は、台所で朝から晩まで大変な仕事をしなくてはなりませんでした。夜明け前に

[1] その他の話においても、殺した証拠として、「3つの言葉」(KHM 033) では目と舌、「白雪姫」(KHM 053) では肺と肝臓、「なでしこ」(KHM 076) では心臓と舌を持って来るよう命じられている。

[2] 2話を比較するとベヒシュタインの方が全体的に短くまとめられており、例外的に描写の量はグリム兄弟の話よりも少ない。そのためシェルフは、誰かがグリム兄弟の話をまとめた (短くした) ものをベヒシュタインに語った可能性があると考えている (Bechstein 1999 S. 820f.)。

> 起きて、水を運んで、**火をおこし**、料理をして、洗濯をしなければならなかったのです。[...] 夕方、継娘が働いて疲れていても、**ベッドには入れず、かまどのわきの灰の中へ横にならなければなりませんでした。**それでいつも埃だらけで汚らしく見えたので、みんなはこの娘を灰かぶり (Aschenputtel) と呼んだのでした (S. 137)。

このように、「灰かぶり」においては、グリム兄弟版の方が描写が詳しい。とりわけ詳細に語られるのは、継姉たちの意地悪さである。そうした悪口雑言はベヒシュタイン版には見られない。中でも下線部の言葉は、グリム兄弟が敢えて第6版で書き加えたものである(本論第I部第2章参照)。このようにグリム兄弟が継姉の意地悪さの度合いを強めている理由のひとつには、善と悪のコントラストを強調し、継姉が最後に受ける厳しい罰に見合うだけの悪人であることを呈示しようとしたことが考えられる[1]。もうひとつ、ここで着目すべきは、グリム兄弟が灰かぶりの運命を、クードルーンが耐え忍ばねばならない屈辱と結び付けていたことであろう。グリム兄弟版では、クードルーンと同様に「火をおこすこと」が、灰かぶりに課せられた仕事のひとつとなっている[2]。これは、グリム兄弟版では初版の段階より語られているのに対し、ベヒシュタイン版には存在しない。

またグリム兄弟の灰かぶりには、彼女の部屋など考えられないが、ベヒシュタイン版では屋根裏部屋があてがわれている。ただし、それでは灰かぶりという名前の由来が説明されないため、娘は暖をとるために**自主的に**かまどの灰の中にもぐり込んでいるのである。一方グリムの灰かぶりは、かまどの脇の灰の中で寝なければならない。この点においても、グリムの灰かぶりの方が酷い仕打ちを受けているわけだが、やはりグリム兄弟は灰の中に座ることに、オデュッセウスを連想していたことを思い返したい (本論第II部第2章参照)。このように、「灰かぶり」においては全体的にグリム兄弟版の方が継姉たちの意地悪さは徹底されており、また兄弟の加筆によってそれが強められた傾向さえも見られるのだが、それは彼らが残酷さに傾倒していたためではなく、古い伝承とのつながりへの関心の深さに拠るものだと考えられる。

次に、「灰かぶり」の終結部を考察してみよう。グリム兄弟版ではこうである。継姉たちは、鳩によって両目をつつき出されてしまい、「意地悪と間違いのために、目が見えないという一生続く罰を受けました」(Grimm 1980 Bd. 1 S. 144)。

この残酷な罰は、子ども向きの絵本では削除されることも多い。ところが、『昔話集』においては、この罰は、グリム兄弟によって第2版より新たに付け足されたものなのである[3]。

そして、このように厳しい罰は、和解に終わるペローの「サンドリヨン」とは、好対照を成している。

---

[1] 昔話はとりわけ極端な対照を好むものであり、登場人物は、完全に美しく善良であるか、あるいは完全に醜く悪人なのである。そうして最後には最高の報償あるいは残酷な罰が与えられる (Lüthi 1992 S. 34f.)。

[2] グリムが「灰かぶり」につけた注釈の中で、「(クードルーンは) 王妃であるにもかかわらず、**火を起こし**、塵を自分の髪の毛で拭き取らせられる」(Grimm 1994 Bd. 3 S. 50) と記していることは、既に指摘した通りである (本論第II部第1章参照)。

[3] この罰は、ベヒシュタイン版にも受け継がれ、ほぼ同様に語られている (Bechstein 1999 S. 292)。

二人の姉は、その時、サンドリヨンこそ舞踏会で見た美しい女性であることがわかりました。**二人はサンドリヨンの足もとに身を投げ出し、それまでサンドリヨンが耐えてきた意地悪な振舞いのすべてを詫びます。**サンドリヨンは姉たちを立ちあがらせると、**キスをして、喜んで許しますとも、どうかいつまでもわたしを好きでいてください、といいました。**美しく装った姿のサンドリヨンは、そのまま若い王子のもとへ連れて行かれます。王子は、これまでに増して美しいと思い、それからいく日も経たぬうちに結婚しました。**サンドリヨンは、美しいばかりでなく、優しい心の持主ですから、**二人の姉を宮廷に住まわせると、早速その日のうちに、宮廷の二人の大貴族と結婚させました (ペロー 1982 (新倉訳) S. 222)[1]。

グリム兄弟版の継姉とは違い、ペローの継姉らは自ら詫びており、それに対してサンドリヨンも喜んで許しを与えているのである[2]。

オーノワ夫人の「サンドリオン・フィネット」[3]における、ヒロインの最後の振舞い方も、ペローに近い。

フィネットは二人の姉がやってきたのを知ると、二人を呼びよせました。**うんとしかめ面をして、二人にしかえしをしてもあたりまえの事ですのに、フィネットは立ちあがって二人の側に行くと、やさしく接吻し、おきさき様にこう紹介しました。**

「おきさき様、私の二人のやさしい姉でございます。どうぞかわいがってやって下さいまし。」

二人の姉はフィネットのやさしさにすっかり感動して、ひとことも口がきけませんでした (オーノワ夫人 1981 (上村訳) S. 142)[4]。

オーノワ夫人の話では、姉たち (継姉ではない) もさほど酷いことはしていなかったということもあるが、グリム兄弟の「灰かぶり」と比較した場合、フランスのヒロインは、どちらも寛容さを見せている[5]。

---

[1] Perrault 1866 S. 69f.

[2] グリムの登場人物が平面的に描かれているのに対して、ペローの登場人物はリアルな人間として描かれている (Röhrich 2001 S. 185)。ペローは主人公にも欠点があることを描写するのだが (例えば、「眠れる森の美女」は、王女が「とてもせっかちで、少し軽はずみのほうでした」ということも王女が眠りに陥る原因とされている)、そうしてリアルな人間像を提示しているからこそ、悪人に対する残酷な罰もリアルに受け取られてしまう可能性があるため、温和な結末を選んだと考えられる。

[3]「サンドリオン・フィネット」が「灰かぶり」に相当すると、グリム自身が指摘している (Grimm 1994 Bd. 3 S. 51)。この話の導入部で 3 人の娘たちは、「ヘンゼルとグレーテル」同様に親に捨てられている。3 人は森の中で、人食いを倒し、その家に住む。そこでフィネットは、灰かぶりと同様に、上の姉ふたり (継姉ではない) に家事いっさいを押し付けられ、自分だけ舞踏会には行かせてもらえない。しかし、あるとき屋敷の中で洋服を見つけて、それを着て舞踏会に行き、王子の心を奪う。フィネットは靴を落としてしまい、王子が、その靴がぴったり合う人としか結婚しないと宣言するのは「灰かぶり」と同様である。

[4] D'Aulnoy 1997 Tome 1 S. 384.

[5] 先に引用したオーノワ夫人の「ロゼット姫」においても、ロゼット姫を海につき落した乳母と娘と船頭は、3 人とも最後には許されている。

ただし、グリム兄弟の昔話においても、復讐心に燃えた主人公が自ら復讐を行うわけではないことを特筆しておく必要がある[1]。加えて、罰が下される場面においても、姉たちの痛みは描写されておらず、リアルな感じは乏しく[2]、残酷さへの関心からの描写はなされていない。それは昔話の文体についてのリューティの指摘にぴたりと当てはまる。

> 残酷なように見える罰も、実際に恐ろしく感じさせるものではない。残酷な罰を受ける人物は形があるだけで、生身の人間ではないのである。その苦しみが詳しく描かれることがないのは、昔話の他の要素と同様である (Lüthi 1989 S. 33)。

そして、グリム兄弟がこのように残酷な罰を**第2版**から敢えて付け加えたことに関しても、ひとつのヒントが『昔話集』**第2版**に付けられた前書きに示されている。

そこでヴィルヘルムは、昔話の中に見られる異教の信仰の名残りを取り上げている。ヴィルヘルムは「鳥もしばしば精霊と見なされている」ことを指摘し、それが昔話の中でどのように現れているかという一連の記述の中に、「鳩は、かわいそうな子どものために灰の中からエンドウ豆をより分けてあげる。しかし、意地悪な姉たちの目はつつき出してしまう」というのがある (W. Grimm 1992 Bd. 1 S. 339f.)。彼はここで昔話の題名を名指ししてはいないが、これは明らかに「灰かぶり」の話を意図している。

つまり、かの残酷な罰の中にも異教の信仰の名残りとしての鳩の性質が現れていると考えたからこそ、目をつつき出す場面を付け足したようなのだ。

残念ながら、『神話学』第11章の鳥の項にも、『ドイツ法故事誌』の罰の章にも「灰かぶり」に関する言及は見つからなかった。

ただし「灰かぶり」(KHM 021) に付けた注釈の中には、「鳩は無垢なものをより分ける(ついばみ集める)」という指摘がなされ、パウリの「「主の祈り」を唱えた女のこと」が紹介されている (Grimm 1994 Bd. 3 S. 50)。このパウリの話は本論第II部第1章に全文を引用してある。この中に出てくる敬虔な女の涙をついばむ鳩と、「灰かぶり」の中の鳩を、グリム兄弟は同様に関連づけていたのである。

刑罰としての目のえぐり出しは――やはりこれもグリム兄弟自身による指摘は見つからなかったが――、『昔話百科辞典』によれば、倫理的なモチーフとして、古くから語られているものだという。例えば古代ギリシアのアリストパネス (前445頃-前385年頃) による『鳥』(前414年) の中では、偽の誓いをした者の目を大鴉がえぐり出すことが語られている[3]。さらにローマ人のアイリアノス (2世紀後半-3世紀) は、『動物誌 (動物の特性につ

---

[1] 「昔話は残酷な罰は知っているが、復讐心は知らない。(悪人が主人公自身によって罰せられることはほとんどない。これを受け持つ者は脇役か彼岸者である)」(Lüthi 1992 S. 17)。

[2] 姉たちは、花嫁花婿が教会に行く際に片方の目をつつき出され、ふたりが教会から出てきた時にもう片方の目をつつき出されている。野村が指摘するように、片方の目をつつき出された時点で何らかの反応をするのが普通で、そのまま平気で教会の結婚式に参加し、帰り道で同じ罰を甘受するというのは現実的ではないと言える (野村 1991a S. 35f.)。

[3] 「誰にしろもし鴉にかけてまたゾェウスにかけて誓ったとき、嘘をやれば大鴉がそうっとその傍にやって来て、つっと飛びついて目を啄いて抉りだしちまうって訳でさ」(アリストパネス 1944 (呉訳) S. 158)。

いて)』[1]の第 8 巻にて、コウノトリが姦通した女の目をえぐり出す話を語っているという (EM Bd. 2 S. 447)。またパウリの『冗談とまじめ』においても、やはり「姦通を行った者の両目がえぐり出されること」[2]という話が語られている (パウリ 1999 S. 240)。アリストパネスは『ドイツ法故事誌』の資料として用いられているものであるし、アイリアノスは、グリム兄弟がまさに「灰かぶり」の注の中で言及している人物である[3]。むろん、パウリは第II部でも考察したように、注釈の中でしばしば指摘されている。つまり、グリム兄弟が、そうした古い文学の中に現れている罰をも想起していた可能性は充分にあるだろう。

参考までに言及するならば、『ドイツ伝説集』の中でも同じ罰が語られている。例えば「ヒルデガルト」(442 番) では、無実であるのに不義の疑いをかけられたヒルデガルトが、両目をえぐり出して国から追い出されそうになるが、犬が身代わりとなっている (Grimm 1992 Bd. 2 S. 89f.)。また、「メルヒタールの畑の雄牛」(515 番) においては、美しい雄牛が兵士によって連れ去られそうになったため、農夫の息子が兵士の骨を砕く。息子は恐れをなして逃げるが、息子の代わりに老父が両目をえぐり取られ、財産を没収されている (Grimm 1992 Bd. 2 S. 175f.)。

ところがグリム兄弟の昔話の中の残酷な罰は、こうした文脈で理解されてこなかったように思える。例えばエリスは、グリム兄弟は道徳的に見てそれに値する人物に対しては「暴力と残酷さのレベルを上げている」(Ellis 1983 S. 79) と指摘し、またタタールも、次のように述べる。

> グリム兄弟は、悪者たちに下される罰の残酷さを和らげたり、昔話から痛みや苦しみを取り除いたりする機会を生かすことはほとんどなかった。[...] むしろグリム兄弟は、暴力的なエピソードを加え、強めている (Tatar 1987 S. 5)。

しかし、これまで考察してきたように、グリム兄弟は、継姉の痛みを描写したり、暴力や残酷さを呈示し読者の恐怖心を煽るような語り方はしていない。グリム兄弟の場合には伝承のつらなりといったことに関心を寄せていたことを常に考慮する必要があるだろう。

さて、恐怖心を呼び起こすような描写としては、以下のハウフの場面が挙げられるだろう。ハウフは、ビーダーマイヤー時代に広まっていた恐怖小説 (Schauderroman) 風の話も書いているからだ[4](EM Bd. 6 S. 571, 中谷 1998 S. 73)。以下は、『隊商』の「切られた手の

---

[1] 全 17 巻、758 話である。動物全般から植物、鉱石類についての記述である。大部分は他の書物からの受け売りだという (アリアノス 1989 S. 446)

[2] 姦通の罪で逮捕された者は、両方の目をえぐり出すという法律を作った王の話である。

[3] ただし、目に関してではなく、アイリアノスの『ギリシア奇談集』の遊女ロドピスの話が指摘されている。彼女の入浴中に、鷲が靴の片方をつかんで飛び去る。鷲はそれをプサンメティコス王の懐に落す。王は靴の持ち主を探し出して妻にするのである (アイリアノス 1989 S. 390)。グリム兄弟は、この話を「灰かぶり」の靴と結びつけている (Grimm 1994 Bd. 3 S. 48)。

[4] 例えば、『隊商』の「幽霊船の話」や『シュペッサルトの宿屋』の「ステーンフォルの洞穴」がある。後者は、スコットランドの伝説で、難破した船の乗組員の亡霊を呼び出し、宝を手に入れようとする話である。

話」からの引用である。主人公の男は、赤マントの男に依頼され、死んだ娘の首を切断することになるのだが、実際にはその娘が生きていたことが分かる場面である。

> それから私は一番鋭いメスを取って、一気に喉を切断しました。でも、何と驚いたことでしょう！死人は両目を開いて、すぐにまた閉じたのです。そして彼女は深い息をして、今初めて、息を引きとったように見えました。同時に傷口から私の方に一筋の熱い血が噴出しました。この哀れな女を殺したのは、私なのだということがはっきり分かりました。[...] それで頭を完全に切り離そうとしました。**すると死にかかった女はもう一度呻き、苦しそうに動いて、のびて死にました。恐怖が私を襲い、私は震えながら部屋から駆け出しました** (Hauff 1969 Bd. 2 S. 42f.)。

民話では、こうしたリアルな描写がなされたり、血が流れることはない[1]。ハウフと比較してみても、グリム兄弟が恐怖を煽るための描写に傾倒していないことはいっそう明らかとなるだろう。

さて、残酷な罰について、もう少し考察を続けたい。残酷な罰が下される人物として有名なのは、何といっても「白雪姫」(KHM 053) の継母だろう。グリム兄弟の「白雪姫」では、白雪姫の殺害を何度も目論んだ継母は、最後には、次のような罰を受けている。

> それで、意地の悪い女 (継母) は呪いの言葉を吐きましたが、とても不安になって、どうしてよいのか分からなくなりました。最初は結婚式に行くのはやめにしようと思いましたが、落ち着かなかったので、若い妃を見に行かないではいられませんでした。中に入ると、それが白雪姫だと分かりました。驚きと不安で、妃は立ったまま動けなくなってしまいました。しかし、その時には既に**鉄の靴が燃える石炭の火の上に置かれていて、火ばさみで中に運び込まれ、妃の前に置かれました。妃は真っ赤に焼けている靴をはき、床に倒れて死ぬまで踊り続けなければなりませんでした** (Grimm 1980 Bd. 1 S. 278)。

一方、ベヒシュタインの「白雪姫」は、やはり先行するグリム兄弟のテクストへの依存度の高さが指摘されている話のひとつであるが (Schmidt 1984 S. 70)、結末は、明確に異なっている (Vgl. Karlinger 1988 S. 79)。

> それで王妃は、嫉妬と羨望から何と言って、何をすればよいか分かりませんでした。そして心がすっかり不安になって、結婚式にさえ行きたくないくらいでした。けれども自分より美しいという人を見てみたいと思って、出かけて行きました。広間に入ると、これまでで一番美しい王の花嫁として白雪姫が王妃を迎えました。王妃は驚いて

[1] そもそもこの話は、昔話というよりは枠の語り手自身の体験談として語られているものである。そしてまた、この赤マントの男は、実は枠物語に登場する男であることが後に分かるという凝った構成になっている。

地面の中に沈みこむかと思いました。

白雪姫は、最も美しいというだけでなく、気高い心も持っていたため、不誠実な女が行なったひどい行いに対しても、自ら復讐することはしませんでした。しかし、毒を持った虫がやってきて、意地悪なお后の心臓を食いちぎりました。その虫とは、「嫉妬」なのでした (Bechstein 1999 S. 241)。

ベヒシュタインは、「灰かぶり」においてはグリム版の残酷な罰を踏襲していたが、その他の話においては、このように悪い人物の結末をあまりはっきりと (残酷に) 描いていないことが多い[1]。それは、「魂のない怪物」など他の話の例にも如実に表れている (西口 2001 S. 36)。

では、A. L. グリムの「白雪姫」ではどうであろうか。ここでも、継母 (王妃) と継姉 (アーデルハイデ) に罰が与えられている。その罰は、小人の王が、次のように宣告している (文中の「私」は小人の王を指す)。

王妃は、99 年の
99 倍の間
私の城のガラスの棺の中に
眠らなくてはならない、だが命はない。
そしてアーデルハイデは、鏡になって
白雪姫が生きている間じゅう
彼女に仕えなくてはならない。そしていつも
白雪姫がその中の自分の姿を見るたびに
彼女の美しさを羨まねばならない (A. L. Grimm 1992 S. 74)。

ベヒシュタインも A. L. グリムも象徴的な罰となっており、グリム兄弟のものが一番残酷であるようだ。しかしグリム兄弟のものによく似た罰が、ムゼーウスの「リヒルデ」にも見られる。それは、美しいブランカ (継娘) を 3 度殺そうとしたリヒルデに与えられたものである[2]。

教会での式が終わると、婚礼の行列はそろって舞踏会を行う大広間に行きました。技のある**小人たちは、大急ぎで、ぴかぴかの鋼鉄で一足の靴を鍛えあげていました。小人たちはかまどのところに立って、火をおこして、その舞踏靴を深紅色になるまで熱していました。**そこにガスコーニュの骨太の騎士ギュンズランが現れました。そして毒蛇女 (リヒルデのこと) を、ダンスに誘い、花嫁の側の先頭に立つように促しました。女が断っても抵抗しても無駄でした。騎士はたくましい腕で女をかかえ、**小人た**

[1] こうした結末に対してボティックハイマーはこう指摘する。「ベヒシュタインの昔話集の人気は、ルートヴィヒ・リヒターの魅力的な挿絵に負うところもあっただろうが、穏健な親たちが、悪い人物の結末をベヒシュタインが明瞭に描いていないことを好んだのだろう」(Bottigheimer 1987 S. 99)。

[2] 昔話らしく、リヒルデは、気づかぬうちに自ら自分への罰を下している。

ちが灼熱する靴を履かせました。ギュンズランはリヒルデをつれて、速く三拍子を刻みながら、ひきずるようにして広間の下手へと移動して行きました。それで床は煙を出し、彼女の**華奢な足はすっかり焼けてしまい、もう魚の目に悩まされることもなくなってしまいました。**音楽隊はそれに合わせて元気よくフレンチホルンを吹きならしたので、どんな哀願も嘆きも、かしましい音楽にかき消されてしまいました。果てしなく旋回・回転を繰り返した後で、このすばしこい騎士は、熱くなった踊り手——この女はこれまでこんなに熱い三拍子はやってことがありませんでした——を回転しながら広間から連れ出して、階段の下の、準備が整っている塔へと行かせました。そこでこの罪深い女には、悔い改める時間をたっぷりと与えられました。医師のザムブルは、貴重な膏薬を急いで作ってあげたので、**痛み**がやわらいでやけどが治りました (Musäus 1972 S. 111f.)。

ただし、ムゼーウスにおいては、描写が現実的であるが継母が死ぬまで罰が続くわけではないところが異なっている。また、足が焼けて、もう魚の目に悩まされることがなくなった、という、ムゼーウス特有のアイロニーも垣間見えている。

ムゼーウスの夥しい描写に対しては懐疑的であったグリム兄弟であるが、「リヒルデ」の中には「真正 (echt) の筋」があるとして指摘しているのが、まさにこの残酷な罰なのである[1]。そうした価値を見出していたからこそ、こうした残酷な罰を語っているのだろう。そしてグリム兄弟版の継母は、死ぬまで踊り続けなければならないとはいえ、その苦しみや痛みが描写されることはないのだ。

その他、昔話で残酷な罰を受ける人物といえば、偽者を挙げることが出来るだろう。中でも「偽の花嫁」の話に着目してみたい。

グリム兄弟の「兄と妹」(KHM 011) では、継娘が王と結婚して子どもを生んだのを妬み、継母 (魔女) は実の娘とともに城に潜り込み、妃をお風呂で窒息死させる[2]。そして実の娘を継娘の身代わりに仕立てあげる。しかし最後に本物の妃は生き返り、悪事が露見し、意地悪な継母は裁判で**火あぶりの刑に、**娘は**森の獣に引き裂かれる**ことになっている。

このように玉の輿にのった継娘を継母が嫉妬から殺害し、実の娘とすりかえるというパターンは少なくない。「森の中の 3 人の小人」(KHM 013) においても、王妃となった継娘が男児を出産している。そこで継母と実の娘は、ベッドにいた妃を、窓の外の川に投げ落とす。やはりこの話でも実の娘が妃になりすます。最後に悪事は露見し、継母とその娘は、自分で自分に罰を下して「**内側に釘を打った樽に入れて、山の上から川の中にその樽を転げ落とされる**」ことになるのである[3]。

---

[1] グリムは、「リヒルデ」の最後の部分、すなわち小人が熱した靴を継母に履かせ、継母は床が煙を出すまで踊り続けなければならない、という箇所が「真正 (echt) の筋」だとしている (Grimm Bd. 3 S. 102)。

[2] この場面は、本論第 I 部第 2 章の例として取り上げた。

[3] また「白い花嫁と黒い花嫁」(KHM 135) も似た話である。ここでも最後に継母が自ら罰を下し、**裸にされて釘を打った樽に入れられ、馬につながれて引きずり回され**ている。

こういった点では、バジーレも白黒を明確に描いている。「森の中の 3 人の小人」(KHM 013) の類話としてグリム兄弟が取り上げている「三人の妖精」(3 日目第 10 話) という話がある。その最後の部分を見てみよう。カラドーニア (継母) は、以下のような方法で美しい継娘を殺害しようとする。

> カラドーニアは薪の大きな束を持って帰ってきて、大がかりな火をおこしました。そして水をいれた大鍋を火にかけました。水が沸騰し始めると、樽の注ぎ口から熱湯を注ぎ込みました。それでグラッニズィアはすっかりやけどをして、**サルディニアの薬草を食べたときのような歯ぎしりをしました。そして、蛇が脱皮するときみたいに皮膚がむけてしまいました** (Basile 1982 Bd. 3 S. 139)。

しかしこの方法で死ぬのは、実際には実の娘 (グラッニズィア) なのである。こっそりとすり替えられていたためである。そして、自ら実の娘を殺してしまったことを悟った時のカラドーニアの様子も、次のように詳しく描写されている。

> 実の母親の手によって、こんなに残酷なやり方で丸茹でにされた娘の姿を見て、カラドーニアは、髪をかきむしり、顔を引っ掻き、胸を引き裂き、手を噛みちぎり、頭を壁に打ちつけ、足踏み鳴らし、すさまじく叫んだりうなったりしたので、村中の者が駆け寄ってきたほどでした (Basile 1982 Bd. 3 S. 139)。

そして、カラドーニアは最後は井戸に飛び込んで死んでおり[1]、こうして、罪もない継娘をさんざんにいじめてきた悪行の報いを受けている。

それに対して、グリム兄弟の昔話においては厳しく残酷な罰が与えられていても、その罰を受ける者の痛み・苦しみ (歯ぎしり) などは描写されていない。そうした描写をしないことは、民話の文体に適ってもいるのである (Lüthi 1989 S. 33)。また、オーノワ夫人、ペローらのように許しと和解で終わるのでなく、悪に対して最高の罰を与えていることも、やはり極端なものを好む民話の文体には適っていると言えよう[2]。

さて、もう一度、偽者の受ける罰に話を戻そう。これまで考察してきたように、女性の場合は「偽の花嫁」というパターンが多いが、男性の場合には、手柄を横取りして王女と結婚しようとする不届き者となって登場することが多い。例えばグリム兄弟の「ふたりの

---

[1] その他、「天人花」(1 日目第 2 話) においても、悪事を企んだ女性たちは生き埋めにされている。また、「日と月とターリア」(5 日目第 5 話、グリムの「いばら姫」(KHM 050) に相当) においても、ターリアと子どもたちを殺して食べてしまおうとした女は火刑となっている。同様に、ストラパローラでも明確な罰が下されている。「箪笥の中の乙女」(第 1 夜第 4 話) では、自分の娘と結婚しようとした父親は、娘に逃げられると、追跡し、ふたりの王子 (彼にとっては孫) を殺害、その罪を娘になすりつけている。最後にこの悪事は露見し、男は、四つ裂きにされ、死体は犬に与えられている。

[2] リューティが言うところの、抽象的様式である。民話はとりわけ極端な対照を好むものであり、登場人物は、完全に美しく善良であるか、あるいは完全に醜く悪人なのである。そうして最後には最高の報償あるいは残酷な罰が与えられる (Lüthi 1992 S. 34f.)。

兄弟」(KHM 060) では、7つの頭を持つ竜を倒したと偽り、王女と結婚しようとした式部卿は、最後には、**四頭の牛に引き裂かれる**という罰を受けている。「じょうずな狩人」(KHM 111) においても、主人公の手柄を横取りして、王女と結婚しようとした大尉は、やはり**四つ裂きの刑**[1]にされている。やはり男性の場合にも、厳しい罰が与えられていることが分かる。

王子になりすます男が登場する創作昔話には、ハウフの「偽の王子の昔話」(『隊商』) がある。予言によって22歳になるまで友人に育てられていた王子 (親は息子の顔を知らない) がおり、それになりすますのがアレッサンドリアのラバカンという仕立て屋である。もちろん最後には、仕立て屋であることが露見してしまう。そのため、王はこのような判決を下すのである。

> 「おまえには私の恩寵をうける価値はない。しかしおまえのために命乞いをした人がおり、その人の願いを今日は断れないのだ。だから、おまえのみじめな命は助けてやる。ただし悪いことはいわないから、さっさと私の国から出ていけ」(Hauff 1969 Bd. 2 S. 97)。

むろん、この仕立て屋は、本物の王子を殺したわけではない。しかし、王子が友人として寄せた信頼を裏切っていながら、罰せられるどころか、最後は幸せを手にしている[2]。というのも、王の相談相手になっている仙女 (Fee)[3]からもらった箱に、決して尽きることのない糸と、ひとりでに縫ってくれる針が入っており、それを使って仕立て屋としての評判をあげることが出来たからである。そしてラバカン自身も、最後にはこう考える。

> 「でも仕立て屋のままでいてよかった。なにしろ名誉と栄光には、危険もついてまわるからなぁ」(Hauff 1969 Bd. 2 S. 97)。

このように、登場人物が小市民的な幸せに満足し、仕立て屋が最後に王女と結婚することにはならないところは、ハウフの昔話の特徴である。

こうしたハウフの温和な終わり方に対し、グリム『昔話集』の中の残酷な罰は非常に印象的と言える。

本節で考察してきたように、グリム兄弟は残酷な罰を回避していない。レーリヒが指摘しているように、「こうした (昔話の中の) 残酷な処刑方法の大部分が歴史的な刑罰にぴたりと一致する」、つまり実際に行われた刑罰と一致するという側面がある (Röhrich 2001 S. 143ff.)。グリム兄弟も、既にそのことには着目していた。そして、ヤーコプが1828年に

---

[1] ここでも、罰せられる者は、自分で自分の罰を下している。

[2] ハウフにおいても悪人に死刑の罰が下される場合が稀にある。「コウノトリになったカリフ」(『隊商』) においては、カリフをコウノトリの姿にした魔法使いは、絞首刑となっている。

[3] ラバカンが本物の息子だと信じ込んだ王は、仙女 (Fee) に相談に行く。Fee が登場するところは、フランスの仙女物語風である。グリムは Fee と言う言葉を weise Frau などのドイツ語に変更していたことは何度も指摘した通りである。

上梓した『ドイツ法古事誌』の中でも昔話への言及がなされているのである。

例えば、「小百姓」(KHM 061) であるが、ここでは、小百姓に騙された村人たちが小百姓を裁判にかけ、死刑の判決を下している。そして小百姓は、穴の開いた樽に入れられて川に転げ落とされることになっている (実際には、騙された羊飼いが身代わりとなって、この方法で殺されている)。この昔話が、『ドイツ法故事誌』第 2 巻の「犯罪」章の「罰」の節で言及されているのである。それは、溺死刑についての記述がなされている箇所であり、溺死刑が主に女性と魔女に対する罰だったことが指摘され、文献からの引用がなされた後に、この昔話が指示されている (J. Grimm 1965b Bd. 2 S. 282)。つまりヤーコプは、小百姓が受けることになっているこの罰を、実際の刑との関連で捉えていたのである。

この「小百姓」の場合においてグリム兄弟は、「ウニボス」などの伝承とのつらなりだけでなく、ゲルマン古代の刑の名残りも見出していたのである[1]。

同様に、『ドイツ法故事誌』の「罰」の節では、「舵がなく水の漏る舟に乗せる」という罰が取り上げられている。そこで指摘されているのは「3 枚の蛇の葉」(KHM 016) での、背信的な妻が共犯者と共に穴だらけの舟に乗せられ、海においやられ、じきに波間に沈んだ、という箇所である (J. Grimm 1965b Bd. 2 S. 285)。

また、ヤーコプによる直接の示唆はないが、『昔話集』における書きかえが、法との関連づけから行われたと推察される場合もある。「唄をうたう骨」(KHM 028) においては、弟を殺害した兄が受ける罰は、初版では、「水に投げ込まれる」であったが、第 3 版より「袋の中に縫い込まれて、生きたまま溺死させられました」(Grimm 1980 Bd. 1 S. 142) に書きかえられている。そして『ドイツ法故事誌』第 2 巻の「犯罪」章の「罰」の節には、**親を殺した者や親戚を殺した者は、袋に入れて沈められた**との記述がある (J. Grimm 1965b Bd. 2 S. 278)。つまりここでも、グリム兄弟は単に罰の描写を詳しくしたのではなく、肉親を殺した者が甘受する罰として妥当と思える、具体的なものに変えたと考えられる。

加えて、既に上記で言及したグリム『昔話集』の中の残酷な罰である「火あぶり」、「森の獣に引き裂かれる」、「四つ裂き」といった刑は、(それらの昔話に対する直接の指摘はないものの) 全て『ドイツ法故事誌』第 2 巻の「犯罪」章の「罰」で取りあげられている罰であるし、「釘を打った樽に入れられ引きずり回される」ことも、『昔話集 注釈篇』の中で、オランダの年代記にも記載があるとの指摘がなされている刑なのである (Grimm 1994 Bd. 3 S. 35)。

このように、昔話は、「神話」だけでなく、実際に行なわれていた罰、そしてヤーコプのゲルマン法研究とも結び付けられていくのである。

そしてこの『ドイツ法故事誌』には、刑罰以外の記述もある。例えば、ゲルマン法においては、子捨ては合法であったことは、「ヘンゼルとグレーテル」(KHM 015) との関連で注目出来る記述である。すなわち、合法的な子捨ての理由としては、両親が非常に困窮しているということが認められていたからである。そしてこの記述に付けられた注釈には、

---

[1] ウニボスも最後には樽に入れられ、海に捨てられることになっているが (本論第Ⅱ部第 3 章参照)、計略によって逃れている。

男の新生児よりも女の新生児の方が頻繁に捨てられていたこと、そして今日の「子どものための昔話」(Kindermärchen) にもそういった筋がまだ残されていることが、指摘なされているのだ (J. Grimm 1965b Bd.1 S. 628f.)。こうした関連づけからも、親子間の愛情が重要視された時代にありながら、「ヘンゼルとグレーテル」(KHM 015) において「子捨て」が堂々と語られていることの一因なのだろう。

このように、『ドイツ法故事誌』の中にも昔話に関する記述が見られるのであるが、そのため、『神話学』の場合と同様に、それがグリム兄弟の昔話の編纂に多かれ少なかれ影響を与えていることが考えられる。本論においては、主に「神話」と昔話のつながりを考察したわけであるが、昔話とのつながりは、「神話」に限られたものではない。グリム兄弟は自分たちの研究を、個別の研究と考えていたのではなく、その他の研究同士がつながりを有するものとして、全体として捉えていたことは既に述べた。今後は法との関連という観点からも、『昔話集』をさらに考察することが出来るだろう。そしてさらにはグリム兄弟のその他の著作を含めた視野からの研究が待たれてもいるのである。